

臆話

おぼろばなし

深沢幸弘

無題

静かな午後だった

埃にまみれた静寂が時を支配し、血にまみれた不快感が体を支配する。
抜けるように青い空には、時折、純白の翼を広げて鳥達が横切って行く。

「あれは何て鳥だろう・・・」

日光を柔らかく遮る木立の間から、あれと同じ姿を見たのはいつの事か。
世の中がこんなに荒廃する以前の事だったのは間違いない。

「因果なものだ・・・」

平和な時には気にもかけなかった物事が、こんな世になって気にかかる。

(この疑問は、命のある間に解消されるのだろうか)

誰かあの鳥の名を知る者はいないかと仲間達を振り返った刹那、今考えるべきは他にある事を思い出した。

傷ついた体と傷ついた心の傷ついた仲間達。

戦況は極めて悪い。

五日程前から味方の支援も途絶え、帝都陥落の噂も耳にした。最早敗戦は必至だろう。
それでも戦い続けているのは、別に今もってまだ自軍の勝利を信じているからではない。
いや、むしろこの戦いに対して最初から勝利などを信じていたのだろうか。
どちらかといえば、こうなる事を望んでいたような気もする。

帝都はいつの頃からか変わってしまった。

かつては人々が溢れ、その人々には笑顔が溢れ、人々の笑顔は街の活気を溢れさせ、活気溢れる街にはまた人々が溢れ.....

それが今は見る影も無い。

人々は嘆き、嘆きは街から明るさを失わせた。

(何がいけなかったのだろうか)

先代の皇帝の死後、危惧していた他国からの侵略を受ける事も無く、内政の乱れも概ね整理され、新たな一步を踏み出したばかりだった。

若き現皇帝が即位したのも、まだほんの一年前だ。

人々はその若さに若干の不安はあったものの、即位式での彼の言葉に歓喜し、この国の将来を祝福しあった。

“予は国と共にある”

私もその言葉に安心したものだ。

彼は若い。だが、一国の元首として民を導く力を備えていると...

しかし、そんな私の思いは見事に裏切られた。

いや、裏切られたと思うのは私があさはかであった為かもしれない。

“予は国と共にある”

それは裏を返せば“国もまた予と共にある”という事。

彼は決して嘘はついていない。

ただ、人一倍野心が強かっただけなのだ。

最初は隣国の金鉱が目的だった。

侵略の必要性はなかった。

隣国とは友好関係を維持し、前の代から国交が盛んだった。

だが、彼は大半の者が反対するなか、とうとう隣国侵攻を押し切ってしまった。

“予は国と共にある”

“国もまた予と共にある”

そして私はそれに逆らえない。

彼と共にある国もまた、それには逆らえない。

私はその戦で友を二人斬った。

気が付けば国土は三倍近くに広がっていた。

度重なる他国との戦に疲弊した民は皇帝への不信感を募らせた。

時を同じくして、このところの我が国の動向に業を煮やした各国は同盟を結び、ここに此度の大戦の火蓋が切られることになった。

そうして三ヶ月。

友を斬り、友を斬られ、いつしか俯く癖が体に染み込む頃、ついに民衆の不満も限界をむか

えた。

反乱軍が組織され、反乱軍は同盟軍と共闘。

皇帝は孤立しはじめた。

それからさらに二ヶ月半。

帝都を囲むように建造されている五つの砦の一つに私は赴いた。

無論、この砦で敵軍の侵攻を止める事が目的である。

静かな午後だった

埃にまみれた静寂が時を支配し、血にまみれた不快感が体を支配する。

抜けるように青い空には、時折、純白の翼を広げて鳥達が横切っていく。

戦況は極めて悪い。

五日程前から味方の支援も途絶え、帝都陥落の噂も耳にした。最早敗戦は必至だろう。

(もう、ここらでいいだろう)

私は傷ついた仲間達を、その職務から解放することにした。

兵士としてではなく、一国民として投降していくのだ。

もう血を流す事もない。

そうして仲間を振り返った時、目の前から無数の名も知らぬ鳥達が羽ばたいた。

(ああ、戦はもう終わっていたんだな)

そう思った時、自分の胸から滴り落ちる雫にはじめて気が付いた……

私は高く笑った。

この身の今は額に谷を刻まれ、拍動に乗り内腑を行き交う紅さえも、最早枯れたと思える程の渴きが四肢を蹂躪する。

言葉を押し出そうにも、零れるのは微かな呼吸音のみ。どうやら喉の表と裏は、互いに相容れないというその身の理を枉げ、いつの間にか一つに重なり、僅かな風を通す隙間しか残さなかったようだ。

頭上遥かには、その恩恵を過剰に押売りする真昼の支配者が光と熱とを撒き散らし、足元に広がる無間の砂が、喘いだ様に海市を呼び込む気温差を生む。

今更そんな幻を追い掛けようとは思わないが、この光の異常屈折が生み出す楽園は、必ず遥か遠方に存在するという事……

それを思うと実に憎々しいと思う気持ちは、やはり抑えられるものでもない。

(蜃気楼の正体など、知らない方が幸せだったかもしれない)

この地に置き去りにされ、もう何日が経ったのだろうか。

日付を忘れない為に、腕に傷を刻んでいたのは何日前迄だったか……

止めようと思った訳ではない。いつしか止めていた……ただそれだけなのだ。

こうなった今、過去の自分に会いに行き、最初から傷など付けるな……

そうお勧めしてやりたいと、愚にも付かぬ事を考え、私は音も出さずに低く笑った。

この傷は今や、膿を作り出す水分さえも持たず、虚しく砂塵を遊ばせる、この枯れ木の洞としてしか存在しない。

実に不愉快だ……

私はただの商人だ。

特別大きな店を持つ訳でもなく、他の商人達に混じり、他の商人達と酒を飲み、他の商人達を羨み、嫉み、そして時には手を組み、他の商人達と腹を探り合い、他の商人達の顔色を伺い、他の商人達と利益を競い合う……ただそれだけの、何処にでもいる商人だ。

故郷には家族も居る。絶世の……とは言い難いが、十人並みな美しさを持つ妻。何より器量の良さが私のお気に入りだ。五つになる息子と、三つになったばかりの娘。月が替わる頃には家族はもう一人増える筈だ。

私はただの商人だ。

そして一人の夫であり、一人の父親だ。

家族に少しでも良い暮らしをさせたいと思う、何処にでもいる一人の男だ。

その思いが、今回の仕事を大きい物にさせた。

幾人かの仲間と隊商を組み旅をする。やがて荷物は膨れ、懐具合も厚みを増し、私達は帰路へ付く。

認識が甘かったのだろう……

小さな商談を繰り返し、心ばかりの小銭に歓喜していた我々には、多大な財を運搬するという事がどういう事なのか分かっていなかったのだ。

たまたま立ち寄った町の酒場で、気が大きくなっていた私達は、商売の成功を大音声に謳い、居並ぶ面々に酒まで振舞った。

認識が甘かったのだろう……

それだけ派手な事をしていれば、噂が盗賊の耳に入るのも当然だ。

この砂漠に差し掛かった時、私達は野盗の群れに取り囲まれた。そもそも、これだけ大きな商売をするのに、隊商を護る用心棒さえ雇っていなかったのも間違いだ。

仲間は全て殺された。彼等は金品を奪うだけではなく、その相手の生涯を奪い取る事に悦楽を見出しているかの様に、血に酔った表情で何度も斬り付ける。

私はまだ生きていた。

殺されてはなるものか……

仲間の死体を被り、必死に息を潜めて時が過ぎるのを待っていた。

どれほどの時間そうしていたのだろうか……

仲間の死体の下から這い出して、私はゆっくりと歩き出した。

生きている事を喜び、故郷へ帰るのだと心に決めた。馬も駱駝も必要無い。この二本の足があれば、必ず帰り着く事が出来ると疑わなかった。

しかし……その生への喜びが、何故あの時一緒に殺されなかったのかという後悔に変わるのに、そんなに時間は掛からなかった。

もう何日が経ったのだろうか。

日付を忘れない為に、腕に傷を刻んでいたのは何日前迄だったか……

遂に私は動く事も出来なくなった。身体は楔を穿たれたように、意思を傾けようとも反応しない。

頭上の支配者はいよいよその熱気を増し、見上げるその眼を焼いていく。

不意にその熱気を遮るものが視界に入った。その影は束の間、しかしまた間を置かずに現れる。

(喰らいに来たのか)

私と支配者の間に円を描いて存在する影持つ翼には、明確な食欲が見て取れる。

構いはしない……

私の身体は、そうして鳥達が空へと放ってくれるのだ。そうすれば、この地を歩くよりも早く、私は故郷に辿り着くだろう。

そんな空想に身を委ねた自分に、私はまた低く笑った。

砂の塔が崩れる様に、嘴に啄ばれる私の身体は、しかし渴きの為にさらさらと風に溶けていく。

放たれた意識は空を包み、私は故郷を指して飛ぶ。

時と共に希薄になっていく意識が、遠くで産声の様なものを耳にした。

「お帰りなさい……」

妻の声が聞こえた気がして、私は高く笑った。

その笑い声に重なるように、私はまた産声を耳にした。それが妙に嬉しくて、私は一層高い笑い声を、涙と共に送り出した。

無間の歩み

気が付いたのは……

時折明かりを歪ませる玻璃に似た輝きの導きであった。

双眸は働きを拒み、僅かな気力さえその行動の理由にならぬよう、墮つる事への配慮を忘れない。

気懈さを纏う事の心地良さは、臆て温やかに、朱艶の衣を四肢への餞とする。

都には何時しか噂が流れていた。

旅人の歩みは時を選び、日差しの強さを避ける事も厭わずに酷暑の中を突き進む。

夕暮れを恐れ、急ぐ旅路でさえも宵闇に足を止めさせるその噂の主は……誰在ろう鬼であった。

近頃都に流行るもの。

生臭坊主に物見歌、無縁仏に流行病、貧乏貴族に押し込み強盗、そして夜に降る峠の悪鬼。

最初は小さな獣の屍だった。

山に住まう獣同士の争いと、人々はさして気にも留めずにいたのだが、臆てそれが家畜にまで害を及ぼすようになると、流石に見過ごす訳にはいかなくなった。

より大きな獣の仕業と思い、方々に罾を仕掛けて回った。

だがその翌日、人々は既成概念の中に居る自らを大きく省みる事になる。

罾は悉くすり抜けられ……いや、寧ろ明確な意思を持って回避されていたと言うのが正しく思える程、隠されたそれらを見付け出したその者は、まるで人々を嘲笑うかのように角持つ四足を攫って行った。

知恵のある獣。

導き出されたその答えはいずれ人形を模し、人々の頭の中で不吉と重なる事で鬼の姿を結ぶ。それが噂を泳ぐ為の鰭を持ち、畏怖と興趣を兼ね備え、広く世上に蔓延するのは、最早神仏の教えを流布する事よりも容易かった。

近頃都に流行るもの。

生臭坊主に物見歌、無縁仏に流行病、貧乏貴族に押し込み強盗、そして夜に降る峠の悪鬼。

抗する術も無く過ぎ行く日々の中、鬼は遂に四足から二足歩行の生き物へと標的を変え始める。

時を置かず、此処に鬼成敗の勅が飛ぶ。

私は、その勅に野心を抱いた一人の素浪人であった。

宵を待ち、腕に憶えの兵達は銘々にその得物を頼りに山へと分け入る。そして夜明けと共に帰って来る者は、日を追う毎に減っていく。

始めのうちは、帰らぬ者達は嘲笑の対象にしかならなかった。だが、いつしか生き残った者達が幸運であったのだと誰もが悟り始める。それ以来、夜毎に少なくなる人数は、山で消えたという理由以外にも説明が付くようになった。

或る夜。それが定めし夜であるとは気付かぬまま、私は山へと立ち入った。

.....私は鬼と出会った。

噂は所詮人の戯れ.....そう思っていた私は、此処に現実として存在する鬼の姿に、全ての思考と、全ての感覚が消えていくのを感じていた。

此れなる者を形容する言葉を、私は持ち合わせていなかった。そしてその異形の者は、今何を語るでもなく私の目の前に立ち、血腥い吐息を荒々しく吐き散らす。

喰われるのだな.....

私の頭に思考が帰ってきたのは、自らの中にその覚悟が生まれた時だった。

香に焚き詰めた様な濃厚な死臭。それを携えながら、何故にこの者は私を見下ろすだけなのか。その疑問が、一握りの冷静さを私に施したのだ。

.....お前は何者だ.....

そう問い掛ける私に、鬼は緩やかに、併しその問いを待っていたかのように口を開く。

聞けばこの鬼は、かつて人であったと言う。

遠い昔、大きな飢餓が人々を襲った時代にこの者は生きていた。

饑じさは弱きからその猛威を振るう。満足な食を得られぬ母は、臆てその乳房を枯らしてしまう。枯れた乳房にいくら泣いてみても、胸に抱いた我が子の泣き声に変わる事は出来ないのだ。

その時代、こうして果てていく赤子が、やがて緋色の風に崩れてしまうまで抱き続け、自らもその風に身を溶かす.....。そんな母親が、自らを塔婆として狂い咲いていた。

この鬼もそんな母の一人であった。

少し違う所があったとすれば.....それはこの母親が、我が子を喰ったという事だ。

それは哀しさ故か、苦しさ故か、或いは深い愛故か。

我が子の肉を喰らった母が次に目を覚ました時、既にその姿は鬼であったと言う。

それからどれ程の時間が流れたのか.....

鬼は我が子を求め続けた。鬼は我が子を捜し続けた。

そこまでを話すと、鬼は静かにその灼熱色の瞳を閉じた。

そしてまるで、遠く長く歩いて来た道程の、これが終焉であるかの様に大きく一つ息を付いた。

喰われるのだな.....

私は改めて覚悟を決め、鬼を真似て両の眼を臥せた。

瞬間.....痛みと認識する事に時を擁す程の激痛が胸を貫き、身体の至る所に濁流となった紅雨を打ち付ける。

双眸は働きを拒み、僅かな気力さえその行動の理由にならぬよう、墮つる事への配慮を忘れない。

気懈さを纏う事の心地良さは、臆て温やかに、朱艶の衣を四肢への餞とする。

そんな中、気が付いたのは.....

時折明かりを歪ませる玻璃に似た輝きの導きであった。

私の閉じた瞳をその玻璃の珠が撫でていく。転がり落ちるそれが、その母鬼の双眸の恩恵であると知った時、私は懐かしさに安らぐ自分を感じていた。

この鬼の子とは、私の事だったのだな.....

永遠を渡り、私はまたこうして母の血肉となる。そして母はまた、永遠を歩き私を捜すのだ。

連なる輪廻に、私と母はこうして罪を重ねていく。

それは哀しさ故か、苦しさ故か、或いは深い愛故か。

その答えは望んでも得られず、そして自ら望んで、それを得ようともしないままに.....

禁忌

ひょっこりと顔を出した其れは、初めこそ怯えた様子を見せていたものの、そう時を待たずに、その身の罔々しさを露呈し始める。

純白……という表現が相応しいであろうその毛並みは、誰の手に囚るものかは知らねど、然し確りと手入れが行き届き、その一本一本が、言葉少なな煌めきを静寂という名の美しさに昇華させてしまう程に神々しくもある。

であるにも拘わらず、其れに神掛かった何かを感じないのは、其れが持つ無邪気の成せる技なのであろう。

其の日はとても風の強い朝だった。

私はいつもの様に仕事へ出掛ける支度をしていたが、このまま風の収まる気配が無いようなら、今日の仕事は止めにしようと思案もしている所だった。

迷信と思っているが、幼少の頃より祖母に繰り返し聞かせられた説話が、今でも此の身には血液の様に流れている。

山が風を孕む時、其処には山神の使いが職務に勤しむ姿があるという。

故に人が立ち入る事は許されず、古来より風の強い日は誰も山へ分け入る事は無かったのだ。

私の仕事は山に棲む四つ足を相手とし、其の者との一期一会を楽しむ違まも無いままに、相手の生命の終わりと私の生命の継続を賭け、互いに言葉の代わりに技を見せ合う事がその大半を占めている。

風の強い日には、当然相手を狙う鏃も逸れようというもの。

昔の人は其れを神の意志と捉え、そうした日に獲物を狩り捕る事を禁忌としたのかもしれない。何れにしる、少々気に掛ける程度で、その話し自体を信じていなかった私は、風の緩む事もあるやもしれぬと考え、一人山へと踏み込んだ。

山は思いの外静かであった。

一足踏み込んだその時から、麓の強風が嘘の様に静かであった。

無風となった山中は、僅かな木の葉のざわめきさえも聞こえず、此の身の奏でる幽かな衣擦れが、一人語りを繰り返すばかりであった。

弓を使うのに、此程恵まれた環境にはそう多く出逢える訳ではない。私は大きな成果を期待した。

四半刻も歩いた頃だろうか、不意に視界の端を何かが掠め、私は反射的に小さく身を屈めた。

木々の陰に隠れる様に動きつつ、徐々に其の者の正体を見極めるべく距離を縮める。
巨大な山毛櫨の木の幹を回り込み、気取られぬ様に呼吸を殺して覗き込めば、其処に居たのは一頭の山犬であった。
純白の毛皮を陽光に煌めかせ、まるで自分自身が光を発しているかの如く、周囲の木々を隷属させる。

物心付いた時から山へ入っていた私も、今までこんなに美しい光景を目にした事が無い。
成程、老人達はこの山犬を知っていたのかもしれない。
此の姿を目にしては、神の使いと考えたのも分からなくはない。
恐らく彼等の環境を守り、我等と共に山を守っていく事を望んだのかもしれない。

そんな事を考えながら、私は暫くその山犬の姿に見蕩れていた。
どれ程そうしていたのか……
不意に山犬が何かに気が付き首を上げた。
よもや私の存在に気が付いたのではと、私は木陰に入り身を固くする。
だが、どうやらその対象は私ではなかった様だ。

私の位置からはよく見えないが、どうやら私と山犬を挟んだ反対側にその対象は存在するらしい。
必然的に私に背中を向ける形になった山犬を見て、私は心と猟師としての己に立ち返る。
もし……もし私があの子を仕留めたら、果たして私の腕前は神にさえも誇れるものではあるまいか。

生まれてしまった野心を再び檻に繋ぐ事は難しく、私は迷う心と裏腹に馬手を箠へと伸ばし、気が付けば弓を強く引き絞っていた。

一瞬の後、無音の山間に風を切る音が鋭く走り、それを耳にした山犬が振り返る。
一瞬の後、振り返った山犬の眉間と、私の鎌の軌道が重なる。
一瞬の後、無音の山間にけたたましい咆吼が鳴り響く。

哀しげなその鳴き声は、倒れ逝く山犬の身体に付き従う様に、聴て木々の隙間に消えていく。
私は見事に山犬を仕留めた、その喜びに打ち震えた。
誰に話すでもなく、自画自賛の様な独り言を繰り返しては、己の手腕に口元が綻んだ。

……と、その時だった。

動かなくなった山犬の影から、小さな山犬が姿を現した。

純白……という表現が相応しいであろうその毛並みは、恐らく倒れた山犬が嘗め繕い、確りと手入れが行き届き、その一本一本が、言葉少なな煌めきを静寂という名の美しさに昇華させてしまう程に神々しくもある。

であるにも拘わらず、其れに神掛かった何かを感じないのは、其れが持つ無邪気の成せる技なのであろう。

そう、山犬は母であり、山犬が気を引かれていたのは、愛しき我が子であったのだ。

最早何も語らないその母に縋る子犬を目の当たりにし、私にはどうしようもない罪悪感が芽生え始めていた。

私の此の小さな心を満たす為に、今こうして子犬に切なさを覚えているのだろう……

自らをそう嘲りつつも、私はこの子犬の身を引き受けずにはいられなかった。

あれから数日……

ひょっこりと顔を出した其れは、初めこそ怯えた様子を見せていたものの、そう時を待たずに、その身の凶々しさを露呈し始める。

人も山犬も、子供とは同じようなものだ。

そう考えながら、私は子犬の食事を用意し始める。

「さあ、食事に致そう」

私の呼び掛けに、子犬は尻尾を振りつつ近付いて来る。

山犬もその子犬も、やはり神であったのだ。

そして今の私は、人が神を傷付け、剩え其の生命を奪った事への贖罪を果たしているのではなく、人である私が、神に憐れみを抱いた事。そして自らが引き取り、育て上げようとしたその傲慢への報いを受けているのである。

上弦の月が、月光に姿を換えて矢の雨を降らす。矢は純白の毛並みに突き立ち、神の姿を銀色に染める。

「さて、今日は何処を食すのだ」

神の瞳に、ゆっくりと肉色の光が浮かび上がった……

それが吉夢であるのか凶夢であるのか、目覚めの今にはその識別も取れぬまま、ただ淡い微睡みに縋る様にその夢の切れ端に手を伸ばす。しかし、幾ら自らが夢うつつを演じようとも、所詮は生身を以てして夢の片鱗を繋ぎ止める事など出来はしないのだ。

(それこそ夢のまた夢……といった所か……)

己の寝起きの悪さを誰に恥じるでも無い私は、代わりに少し自嘲を籠めて呟いた。

濡れ縁を叩く雨垂れの音を意識したのは、そんな一人座興が闌を迎えた時だった。いつから降り始めていたのだろうか、既に庭先にはいくつかの大きな水溜まりも出来ている。私の眠りを妨げたのは、この雫達の歌声だったのだろう。その事に気が付いた私は、自らが何に導かれて目を覚ましたのか、それさえ即座に理解出来なくなっている己の墮落ぶりに、また小さな嘲りに向けるのだった。

朝餉を得ようと踵を返したその時、私は妙な感覚に呼び戻され、再び庭先に目をやった。

いつからそこに居たのだろうか……

濡れる事を厭わぬとでも言う様に、濡れそぼった僧衣を纏った幾人かの坊主が立ち尽くしている。

あまりに異様な光景に、私は思わず間の抜けた問い掛けをする。

(誰か……死んだのか)

坊主の集団は何も答えなかった。何も答えずに、ただじっと私を見据えて立ち続ける。

この薄気味悪い状況にあって、しかし私は不思議と嫌な気持ちはしなかった。それどころか、この坊主達が私の心に静寂を運んできてくれた様な、そんな気にさえなる。

私はその感覚に身を任せる事にした。身を任せて、遠い我が身に思いを馳せた。

この地に移り住んでどの位になるのだろうか。

世に天下覇業を成さんと野心を抱き、己の善悪を有情全ての善悪と結び付けた者達が跳梁と跋扈を競い合い、勝ち得た先の実りを顧みぬまま、その戦火のもたらす焦土という恩恵に狂喜を繰り返していた頃、私もまた、その戦火に紅き顔を照らし出される者の一人であった。

私は権力に特別な興味は持っていなかった。だが、時が視線を逸らしたまま生き続ける事を許してくれなかつただけなのだ。

最初は誰かの小さな火種に過ぎなかった。

或る夜、私は少し酔いたい気持ちに手を引かれ、酒肴を生業とする者を訪ねた。そこには私と同じく一時の心地良さを求める者が多く集まり、既に酔夢の入口に立つ者も少なくはなかった。

まったく酒とは不思議な奴で、戦に怯えるばかりの弱き者達さえも、舌先三寸で戦鬼と呼ばれる猛将へと変貌させてしまう。

付き合い方を心得なければ、どんな美酒でも悪酒へと変わる。それを知ってか知らでか、その夜も俄仕立ての豪胆者が酒場のあちこちで咆吼を繰り返していた。

日々の鬱積を晴らそうと、弱者が矮小な天下を比べ合う……

そんないつもと変わらない風景だった。

……ただ一点を除いては……

誰かが叫んだ領主への悪口をきっかけに、酒場のあちこちから領主への誹謗が沸き立った。それは中傷を伴って、瞬く間に酒場の全てを同色に染め上げる。弱者はそれによって生まれた奇妙な一体感に酔いを強め、ともすれば一揆を組織し兼ねない勢いとなった。

耳を傾けてみると、その日、この村落の近くでも大きな戦があったらしい。

成程、それに因る被害への憤りもあり、集まった者達の酔いも大きくなっているのだろう。

それは仕方無い事であろうが、やはり彼等はその時「近くで」戦があったという事実にも目を向けるべきだったのだ。

酒場の隅で男が静かに立ち上がるのを、私は何故かひどく落ち着いて眺めていた。

その男が農民でない事は一目で気が付いた。その男の顔が鬼へと変わるのもよく見えていた。その男が抜き放った刀身の冷やかな光さえ、美しいと感嘆する気持ちを覚えられる程に、私は冷静にその光景を眺めていた。

一瞬の後、それまでの喧噪とは種の違った叫び声が酒場に響く。

明らかな異変を告げるその声に、酒場は瞬間静まり返る。次いで殺到する恐怖。狼狽は悲鳴と手を取り、饗宴の場を叫喚の獄へと塗り替える。

それがどれ程の時を経ていたのか分からない。長くも感じ、短くも思えるその時が過ぎて後、私は酒場でただ一人の生き残りとしてその男と対峙していた。

男は領主に仕える侍であった。

私は間違いなくこの男に斬られるのだろう……

そう思うと言い様の無い恐怖と共に、果てしない後悔と怒りが込み上げてきた。

何故、私は今夜ここへ来たのだろうか。

何故、私は領主への批判を止めなかったのだろうか。

どうせ殺されるのなら、何故一緒に悪口を叫ばなかったのだろうか。

そして何故、私はこの男に生殺与奪を握られなければならないのだろうか……

この不公平なまでの力の差は何なのだ……

侍とても人ではないか……

人……では……

その短き時に永劫とも思える程の思考を重ねた末、私に残ったもの。それは生命への執着だった。

相手が何者であるかは最早関係無くなっていた。

男には油断もあったのだろう。それまでの威勢とは裏腹に、翻る刀に怯えて逃げ惑うだけの他の村人同様に、私の事も切り倒すつもりでいたのだろう。

だからその私が牙を剥くなど、夢にも思わなかったのかもしれない。

意表を突かれた男は、しかし即座に体勢を立て直そうとした。

本当なら、そこで私の身体は紅い飛沫を上げて崩れ落ちていたのだろうが、どうやら運は私に向いていた。

男は自らが斬って捨てた村人の血溜りに足を取られ、敢えなく転倒してしまう。

それと同時に、襲い掛かる対象が急に地に倒れ込む形となった私も平衡を失い、覆い被さる様に男の上へと押し掛かる。

男にとっては不運意外の何物でも無かっただろう。自らが転げた際に取り落とした刀が、上手い具合に二人の身体の間落ちる。

私がようやく落ち着きを取り戻した時、そこには累々たる村人の屍に混ざり、一人の侍の絶命した姿があった。

きっかけは、ほんの小さな火種に過ぎない。

侍を手に掛けた事実が、私を再び恐怖と向き合わせる。

逃走を計るも翌朝には捕らえられ、私は今度こそ己の生命が終わるのだと、そう思っていた。

死の恐怖も二度目ともなれば多少落ち着きが出る。ましてや一度目のそれは奇蹟とも呼べる延命、今度ばかりは逃れようも無いのだと、妙に達観した気持ちで、私は領主の前に引き出された。

あの日からどれ程が過ぎたのか.....

領主はとても変わり者だった。

或いは、絶対的な死をもたらす力を持った己.....それを目の前にした筈の農民に、微塵も怯えた様子が感じ取れなかったのを面白がったのかもしれない。

私は召し抱えられ、言われるがままにいくつもの戦場を駆け抜ける兵の一人となっていた。

(どうせ失くした筈の生命)

それが領主の口から私に与えられた施しであった。

時を経て、それでも生き延びていた私は、掻い潜った戦場の数だけ、また勲功も手にし、いつしか領地の一部を任されるようになっていた。

私は自らを生かす為。そして生かし続ける為に、いつの間にか弱者から強者へと変質していた自分に気が付いた。

今の私はあの酒場の侍と同じく、弱き者に理不尽な死を与える事さえ出来る。

(誠、人とは因果な生き物だな.....)

奇妙な巡り合わせと、少し懐かしさに身を任す私を呼び戻したのは、一際大きな雫の撥ねる音だった。

雨はまだ止まない。

僅かに過去を思い、私は、そんな機会を与えてくれた庭先の坊主達に、少し好意を抱き始めていた。

いつまでも濡れ鼠では気の毒な事もあり、私は坊主達を招き入れようと再び振り返った。

.....と、その時だった。

歌声を重ねていた雨垂れが、急に私の耳元でその美声を披露し始めた様な錯覚に溺れつつも、私は今度は瞬時にそれを理解した。

(誰か……死んだのか)

いや、それは私の事。

雨に暮れる墨色の風景の中で、一際鮮やかな朱墨を撒き散らしながら、私は庭先の坊主達に目をやった。

それは、ずぶ濡れの蓑に身を包み、農具を手にした百姓達の姿に他ならなかった。

是非も無し

私の傍らに潜む其れは、僅かなる隙穴に、鎌持つ鼯鼠を押し通す。

私の傍らに潜む其れは、僅かばかりの澱に、泥田坊を放して総べる。

私の傍らに潜む其れは、僅かなる噴煙に、火車にて轍を刻み込む。

私の傍らに潜む其れは、僅かばかりの霧に、脚無き塗壁を築いて立たす。

故に私は、身罷るその日までを天の邪鬼と共に歩むのだ。

私は一人。
寄る辺無き者。

私が初めて此の世を視界に捉えた時、此の身は孤独の歌う子守歌に包まれていた。
私が初めて此の世に両手を伸ばした時、此の身は慈しみに触れられぬ事を悟った。
私が初めて此の世で言葉を発した時、此の身は恐怖を呼び込む音曲を学んだ。

私は一人。
寄る辺無き者。

雨が降っている。
寒雨に煌めく黒く焼け落ちた木々は、然し人の手に因る意匠が施された痕跡を覗かせて、此処に
曾て人間が生活していた事を物語る。いや、善く善く注意して見れば、只焼けた樹木かと思った
其れ等は、きちんと人の手の入った木材であり、今は屋根も壁も無い此の吹き曝しが、家屋の形
を取っていた事を偲ばせていた。
そうであるならば、まだ私には助けを求める望みがある事になる。此の家が倒壊してからどれ程
の歳月が流れているのかは分からない。もしかしたら、最早此の家に限らず、周辺全てが廃墟と
化しているのかも知れない。

だが、そうではないかも知れない……
淡く灯った希望に縋る事、其れは臆て、途方も無い絶望を連れて来た。

未熟な喉を戦慄かせ、一頻り泣き、喚き、誰を呼ぶとも分からぬ儘に救いを求めた時間は、一
人ぼっちを自覚する為の或る種の儀式なのかも知れない。
永遠に続くかと思えた寂しさも、其れに引き連れられた悲しさ共々次第に薄れて消えて行く。其
れは同時に、此の身を知るという事でもあり、又、此の身を受け入れる覚悟でもあった。

私は一人。
寄る辺無き者。

そう分かってしまえば簡単な事だった。
産み落とされた理由など、此の未熟な頭で考察するのも馬鹿馬鹿しい。
私は脆弱であり、自らを生かす法も知らず、そして頼れる親の姿も無い。
双眸が映し出す己の居場所。屋根も壁も崩れ落ちた、此の倒壊した家屋の姿を思い出として、其

の短い生涯に幕を降ろせば良いのだろう。其れが天の望みであるのなら、私は黙って受け入れるより他は無い。いや、此の身に許された最大限の抵抗……轟く様な声を上げて泣き決る事、其の行為が実を結ばなかった以上、私は諦めを選択するより他は無いと、心底そう思ったのだ。

折からの雨が、時の歩みと共に此の身の熱を奪って行く。

其れは即ち、命の灯火が徐々に細くなって行くという事。私はいよいよ最後を覚悟した。

其の時だった。

不意に雨が、其の冷たき指先を遠ざけた。

雨雲は相も変わらず、其処に色濃く立ち籠めているものの、雨脚は急速な衰えを見せ始めていた。

滅びを覚悟したばかりだと言うのに、天とは何と気紛れで、何とも残酷な仕打ちをするものだ。

私は辛々で死ねず、再び生への執着を受け渡されてしまった。

短く弱い息を吐き、私はもう少し抵抗をしてみようと思ひ直す事にした。

這いずる様に右腕を伸ばし、同じ様にして左腕を続け、そうした左右の遣り取りを幾度か連ねた後、臆て其の爪の先が何かに触れた。

其れは細く頼りない、一本の木の枝であった。

然し其れでも、今の私は身を支える何かが欲しくて堪らない。此の体の何処に残っていたのかと思える程、私は熱烈に、強硬に其の枝を絡め取る。

心というのは不思議なもので、どんなに小さくても、己に後ろ盾が出来る事に大きな安心感を持つものだ。私にとってそれは、此の小さな枝である。

枝が私を支えて立たす。

枝が私の行く道を指す。

枝が私に希望を焼べる。

私は其の枯れ枝に勇気付けられ、弱々しくも着実な一步を踏み出した。其の歩みは世界を少しずつ引き寄せ、私に新たな景色を見せる。新たな景色は好奇心を呼び起こし、好奇心は探求心の手を引いて、遂に私の中に生きる楽しみが芽を吹いた。

枝が導いた新世界。

其処は倒壊した此の家の、曾ての壁面であった辺りである。壁板は面影を探すのが困難な程に崩れ、砕け、所々が炭と成り果てている。正常な者ならば、其処に悲しみや絶望を見るのだろうが私は違う。

私には今、あの廃屋の中から抜け出して来たという大きな喜びがある。私の此の先の命は、此の

崩れた屋敷の儂さを大きな土壌として育ち行くのだ。
此の家の憐れは、即ち反転して喜びと成り、勇氣と成る。

私はまだ燃え残っている壁板に手を着き、己の内に広がる高揚感に打ち震えた。
力が見る見る漲って来る。ほんの少し前迄の自分が別人に思える程、私は強く生きている。か細い枝に縋って歩く事も無い。より大きな何かに向かって、私は此の手を伸ばす事が出来る。

生きるのだ。強く。大きく。
踏み出す一步の其の背後で、廃墟の崩れる音がした。

何時しか私は、廃屋を囲んでいた広大な森の中へと歩みを進めていた。
森はとても暖かく、私は歩く程に元気に成った。自らの体が何倍にも膨れ上がり、もう何も恐れる事など無い様な、そんな錯覚や傲慢も生まれ始めていた。

ふと目を遣ると、少し向こうに集落が見える。
思えばこれまで一人切りで過ごして来た私だが、其れは望んでそうした訳では無い。孤独に裏打ちされた人懐こさは、寧ろ隠せぬ程に肥大した感情だと言える。
私は足早に其の村を目指した。

然し、人間とは実に懦弱な生き物だ。自分と違う者を恐れ、排除しようとする浅薄な生き物だ。
私はただ寂しく、人恋しかっただけなのだ。だが村人達は余所者である私を受け入れてはくれなかった。近付けば逃げ出し、心無い者達は水を撒き、砂を浴びせて追い払おうと躍起に成る。
私は悲しく成った。が、同時に腹が立った。私は怒りに任せ、手近な家へ怒鳴り込んだ。

.....瞬間.....

恐怖に引き攣る村人の顔が爛れて行く。
叫ぶ仕種を取りつつも声の無い人々。

最初の家が例外なのではなく、どの家でも私の来訪に村人は同じ行為を繰り返す。そして決まって最後には、幾ら声を掛けようと返事一つしてくれなくなるのだ。まるで私の存在自体が別世界の物である様に、彼等は決まって身動きもせず、ただ沈黙をのみ私に向ける。
豊かだった表情さえ、黒く鎖してしまうのだ。

私は心底悲しく成った。
其の悲しみは私の中で渦と成り、臆て其の渦は大きな叫びと成って天を震わせる。天は叫びに応

じる様に、我が身に逆巻く熱波に絡め、暗く澱んだ雲を引く。大気は湿り、次いで嵐がやって来る。

其れは悲しみの雨。

どれ位そうしていたのだろうか。

泣き叫び、雨に打たれ、誰にともなく悲しみを訴え続けた私は、気が付けば昔の様に、脆弱で自らも救えぬ儂き者へと戻ってしまっていた。

結局、私は誰とも知り合えず、何事も語り合えず、そして孤独の名を忘れる事の出来ぬ儘、再び己の死と向かい合う事に成った。

雨が降っている。

私は一人。

寄る辺無き者。

最後の雨が降りて来る。

其れを見上げた視線の先を稲妻が走り、山の頭上へ懸け降る。

.....落雷.....

燻る我が手を握り締め、私は自分がただの炎であった事を、此の時初めて知ったのだった。

咲き候心

黒塗りの外廊下には薄紅の花弁がちらほらと舞い遊ぶ。
長閑な陽光に魅せられて、薄衣の乱れも其の儘に、私はのそのそと身を乗り出した。

満開を迎えるより聊か時期は早いのだが、魁の如く咲き逸った幾つかの桜花達が、一足先に散り落ちる。

小さな花弁の其の向こうで、大きな桜木は、此から本領を発揮しようと息巻いていた。

庭先には一羽の巨鳥が居る。

嘴は長く、緩やかに湾曲している。羽根は有るが、恐らく退化していて飛ぶ事は出来ないだろう。何より遅しく発達した両足が、地上生活の長さを裏付けている。

風に舞う花弁を啄むと、鳥は桜の根元へと首を巡らせた。

此の鳥は雌である。

桜木の根元には大きな卵が一つ、彼女は花弁を食べ、再び卵を抱きに戻るという生活を、来る日も来る日も繰り返しているのだ。

(今日もまだ、産まれない)

然う思った時、垣根の向こうから隣の隠居が声を掛けた。

「まだ産まれんかね」

私は答える。

「ええ、まだ産まれない」

老人は其れを聞くと、少し寂しい顔をした。

其れに合わせる様に、桜木の足元で鳥が一つ鳴き声を上げる。

甲高くあるが、濁りの無い其の声は吸い込まれる様に空へと消えていく。

すると、桜の蕾が一つ緩やかに綻び、見事に咲いた。

私は老人に尋ねた。

「いつ産まれるのでしょうか」

老人が答える。

「いつか産まれるさ」

私は、そんな事は当たり前だと思ったが、敢えて口には出さなかった。

鳥が一つ鳴く。

今し方咲いた桜が、先を急ぐ様に散り始める。彼女はまた其の花弁を食べるだろう。

卵は未だ孵らない。

見守る私の視線が気に成るのか、彼女が桜の周りを忙しなく歩き始めた。

悪い事をしたと思い視線を外すと、彼女はまた一声鳴いて見せた。

果たして桜が花開く。

何時の間にそう成ったのか、気付くと隣の隠居が垣根を越えて、私と並んで彼女を眺めていた。

不審に思って私が尋ねる。

「いつから其処に」

老人は答えず、ただ私の顔を見てにっこり笑った。

そして鳥が鳴く。

桜が散り、彼女が其れを啄む。

卵は未だ孵らない。

太陽が少し西へ傾いた頃、私と老人は廊下の縁に腰を下ろし、煙管の煙を楽しみ乍ら、相変わらず鳥の姿を眺めていた。

すると老人が、懐から一枚の鯛を取り出した。

肴を出されたとあっては、私も引き下がる訳にはいかない。

一度奥へ引っ込むと、酒を掴んで戻って来る。御猪口の様な洒落た物は無いので、老人の分を茶碗に注ぐと私は酒瓶に直接口を付けた。

僅かな時間、そうして老人と酌み交わした私は、夕陽と呼べる程に傾いた太陽を指差して、老人にこう言った。

「明日は産まれるでしょうか」

すると老人は、酒の匂いのする息を長く吐き出した。

と、桜の下で鳥が一際大きく鳴き声を上げる。

今度は桜は咲かなかった。

赤ら顔の老人は立ち上がり、私の問い掛けに答えもせず、ふらふらと桜の大樹に向かって歩き始める。

然し、近付いて来る老人を見ても、鳥は何も気にしていない様子だった。

臆て老人が桜の幹に手を触れた時、再び彼女が大きな鳴き声を上げた。

其れを合図と許りに、老人が大輪の花を開く。

夕闇が迫る中、初めて目にする大輪の桜花を眺め、私は老人の使っていた茶碗に酒を注ぎ、其の儘一息に呷り干した。

卵は未だ孵らない。

が、明日は屹度産まれるだろう。

焦げている……

仄暗い天空は宵闇の訪れからではなく、其処が四角く切り取られた人工的な天である所為である。

黒色と呼べる程の濃密な鶯色が、矢張り四角い同色の大地より垂直な壁と成って伸び、どんよりとした四角い天を繋いでいた。

目を凝らして見ると、天も矢張り鶯色をしている。

天も地も其の四辺の長さは神経質に均一で、更にうんざり為るのは、天地を繋ぐ四方の壁面さえ其の四辺を均一に揃えられている。

蓋し巨大な賽である。

そして私は其の腹に取り込まれている。

右にも左にも、或いは前でも後でも良いが、其れ其れ同じだけ歩を進めれば必ず壁に手が届く…
…只其れだけの四角い部屋という事だ。

理解すれば至極簡単な事なのだが、其れで居て私は鶯色の中に無間の底深さを感じ、背を預けた壁や見上げる天井、尻の下に感じて居る筈の床板に至っても、己の身との距離を見出せずに居た。

漆黒の空間であれば、或いはもっと落ち着いて居られたのだろうが、幽かに限り有る空間と囁く茶褐色が、私の心にそわそわとした緊張感を注ぎ続けているのだ。

其上何やら体が怠い。

落ち着かぬ心とは裏腹に、身動き一つも億劫という何とも困り果てた状況である。

部屋の中央には高さ四尺程の燭台が一つ置かれて居り、其処で太さ二寸程の蠟燭がゆらゆらと燃えて居る。

不安定な炎の揺らめきが四角い室内に不規則な影を産み落とし、其れが亦、此の空間を無間と思わせる要因の一つと成っているのだ。

蠟燭は絶えず煤を吐き出し、明確な高さと広さを持った無間の天井を覆い尽くす。

懸命に見定めようとする物を、其の傍から霞に隠された様な気分になり、私は弱々しく息を吐いた。

焦げている……

吐き出した呼気を取り返す可く、私は二つの鼻孔に仕事をさせる。

然し何うにも焦げ臭い。

室内の火気は件の蠟燭一つである。

とすれば、焦げた臭いの正体は此に有るのだろう。

私は蠟燭を眺め、其の炎を吸い込む程に鼻を鳴らした。

立上る煤から薄ら甘い臭いがして、何やら噎せる。

不純な物が混ざって居るのだろうか……何とも体に悪そうな臭いであるが、焦げ臭いとは少し違うようだ。

蠟燭から鼻を逸らす様にして、私は再び鼻孔に空気を吸い込んだ。

……つん……

とした。

鼻の中が乾燥した時の様な微弱な埃っぽさ。

然し今、私の鼻は大層潤って居る。

冷えた空気を呼吸した時の様な、幽かな痛みにも似た小さな刺激。

確かに此の四角い部屋は何やら寒い。

正確には、先刻から徐々に寒く成って来ていると言う可きか。

何か暖を取る術は無いかと思い、私は改めて部屋の四方を見渡した。

然るに何も見付からない。

落胆した私が俯くと、程近い床の上で何かが動いた様な気がした。

目を細める様にして其れを見ると、何うにも人の足の様に見える。

注意深く其の爪先から視線を上らせると、丁度目線の高さに膝が現れた。更に視線を上へと歩ませると、次第に腿、腰、腹を経て胸、肩、首、そして顔が浮かび上がった。

一体何時の間に現れたのだろうか……

明王の様に激しい表情である。

天王の様に厳しい出で立ちである。

気が付けば、部屋の中には然うした輩がもう五人、詰まりは全部で六人も佇んで居たのだ。

其の内の一人在私の視線に気が付き顔を覗き込む。

私は恐ろしさに瞳を閉じて俯いたが、其れで相手の顔が近くに有るという気配が消える訳では

無い。

更に良くない事に、目を閉じてしまった私には相手が既に顔を遠ざけたかどうかの判断が付かないから、此の気配が私の疑心に因る小鬼の跳梁であるという断言が出来ない。

私は後悔した。

然し今一度瞳を開く勇気を、私は持ち合わせていないのだ。

自身の作り出した暗黒の世界は、闇故に全てを呑み込み、全てを吐き出す。

「見た」という恐怖が「見えぬ」という恐怖に変容し、瞼の裏の暗闇を不安な妄想で塗り潰す。

漆黒の空間であれば、或いはもっと落ち着いて居られたのだろうが.....などと善くも考えられた物だと、私は先刻の自分の考えを嘲笑った。

焦げている.....

それにしても焦げ臭い。

視界を禍々しい妄想に奪われた所為で、現実的な嗅覚が強く働いているのだろうか、私は再び焦げ臭さが気に成り出した。

或いは恐怖を紛らわせる為に、自らの注意を余所へ移しただけなのかもしれない。

とまれ瞼を閉じた私には、此の焦げ臭さが何処より漂い来るのかを探し求める事は出来ない。

私は仕方無く、此の臭い自体を考察する事にした。

そうして改めて向き合うと、熱した鐵の様な臭いが感じられる。

部屋に有った金属は燭台位だろうか。だが、蠟燭は未だ未だ十分な長さであった筈。にも関わらず其の炎が自らの足元に在る燭台を焦がしているとは考え難い。

私は正体の定まらぬ焦げ臭さに対し、少々苛立ちを覚えた。

苛立ちは幾何かの荒々しさを囁き、鼻息の氣勢を高くした。が、強く送り出した分だけ直ぐに苦しく成り、私は慌てて息を吸う。

苛立ちの策謀に嵌められた.....否、然うではない.....

もう一呼吸を繰り返し、私は苛立ちの冤罪を確認する。

然う言えば、何だか少し息苦しい。

だが、其の割には深くゆっくり呼吸をしている様にも思える。

自分の呼吸に不審を持った私は、其処で初めて焦げ臭さの奇妙な点にも気が付いた。

普く所、臭いとは即ち外気を吸引した際に齎される情報であると私は思っている。然し此の焦げ臭さは何うか……

吸い込む際には微弱だが、送り出すに至って盛んな様子である。吸気に因って運ばれるのは鼻孔に残った残香であり、旅立つ鼻息にこそ焦げ臭さが強いのだ。

という事は、此の鐵の焼けた様なつんとした焦げ臭さは、私の鼻の中に在るという事に成る。

私は逃げ込んだ嗅覚の中で、亦新たな恐怖と出会ってしまったのだ。

得体の知れない臭いを我が身に包み、得体の知れない者達に取り囲まれた自身の姿を想像する。

絶望感からか、途端に体が重く成る。

最早見る事の出来ない鶯色の壁面に。或いは床に、天井に。

其れ等の無間に沈み込む様な錯覚を味わい乍ら、私は明王達の話し声を聞き拾う。

「……て……様……」

能く聞こえない……

「……は此の通り……って居り……」

体が重い……

「……今の……止めの……」

焦げている……

「……こそ、其の御首……」

何うにも焦げ臭い.....

「頂戴仕る」

然うだ此は.....

.....血の臭い.....

瞬間、私の全身に痛みが走る。

其れは恐らく、夥しい程の刀傷。

吹き出し、飛び散った紅色が漆黒の室内にくすみを与え、見慣れぬ鳶色の部屋を作り出したのだ

。

流れ続ける血が共連れを欲しがり、体温を攫って行くのだ。

衰弱する肉体が怠さを蓄え、滅びを指差し呼吸を間引いていたのだ。

然うだ、血だ。

血の臭いだ。

焦げ臭さの正体を把握し、私は自らの臉に手力男を請い招く。

開かれる視界に最初に飛び込んで来たのは、大きく弧を描く光の余韻であった。

其れは刃に跳ね返った蠟燭の光。

残光が演じる太刀筋の軌跡。

私は其れを、美しい……と思った。

朱墨を撒いて宙を舞う私の視界に、切り離された首から下と、其れを行った者とが並んで映る。

そして私は酒気たっぷりに溜息を吐く。

「鬼に横道無きものを」

神便鬼毒の酒に酔い、私は何やら心地良かった。

緑色の風景が緩やかに身体を取り囲む。

隙間無く身体に張り付く緑色には、時々細かな黒色や茶色が浮遊している。

腕を振ろうと、足で蹴ろうと抵抗一つも無いのだが、決して私の身体から離れて行こうとはしない。

大きく暴れるだけ呼吸が荒くなる。

呼吸が荒くなれば吐き出す息も大きくなる。

私は鼓動の招きに呼ばれ、肺腑の奥から気体の塊を解き放った。

其れは大きな球体となり、見る間に天上高くへ舞い上がって行く。

無色透明な丸い息を眺め、私は自分の状況を概ね理解した。

其れは桐の箱に入っていた。

いや……

正しくは、入っているとされていた。

伝え聞く所に因れば、其れは長さにして一尺にも満たないと言う。

水気は一切無く、乾燥して干涸らびた其れは非常に脆い。

其れ故、箱の中には綿が敷き詰められ、少しでも衝撃を緩和する様にしているらしい。

また、乾燥状態を維持する為に、其れの手前で湿気を阻むという目論見もあると聞いたが、其の真偽は分からない。

そして其れには不思議な力が宿り、手にした者の願いを叶えてくれるらしい。

どうにも胡散臭いが、兎に角其れは桐の箱を寝床として、何処かの叢祠の奥に潜んでいるのだそう。

しかし、口伝は何時しか老人の戯言と成り下がり、眉に唾した若者が、白髪のを全てを迷信と嘲笑う。

そうした世に在って、私もまた、古きを軽んじる一人である。

尤も私の場合、古きを顧みる余裕を有していない……と言う方が正しい。

日々の暮らしは、困窮の二文字の他に表現を用いる隙が無い。

家屋と呼べる物は影形も無く、衣服と呼べる物は下帯一枚きりである。

物を乞おうにも器の一つも持たず、伸びきった髭や爪ばかりが私の所有する財産であった。

其れでも生きるという本能だけは、なかなか私から離れてくれない。

草を喰み、根を齧り、泥水を啜りながら、私はただ生きる事を続けていた。
私が自らを人として認識する頃には、既に此の暮らしの中にいた様に思う。
既に父は此の世に無く、母の姿も朧気な記憶でしかない。
しかし、其れでも人並みに言葉を解している以上、やはり独りで育った訳ではないのだろう。
詰まりは其れが、私を人であると認識させている僅かな由縁に相違無い。

或る夜の事。

何時もの様に草の葉や木の根を求める内に、どうした訳か村落の外れへと辿り着いた。

私は出来るだけ他者との接触を避けてきた。

人を覗けば嫉妬が芽生える。

嫉妬を知れば恥辱を味わう。

恥辱を刻めば悪意が起こる。

其れ故に、私は極力誰とも出会わない様に過ごしてきたのだ。

其れが此の夜に限ってどうした事だろうか。

粗末だが暖かな明りを灯した家々が目に入る。

見まいと思っても、一度捉えてしまった其の姿は、目蓋を閉じても消えてはくれない。

宵闇に浮かぶ明り。

其れが見開いた瞳に映る物なのか、其れとも目蓋に焼き付いた物なのかさえ判別不能である。

開けても閉じても見える明りに、私は次第に腹が立ってきた。

其れは妬みの心。

彼等とて決して裕福ではない。

そんな事は百も承知だが、私との隔りは天と地よりも遠くに思える。

あの明りの下では、少なくとも人としての生活が営まれているのだ。

温かな食事、上等でなくとも何かしらの衣を纏い、雨風に晒されない眠りが約束されている。

近付いてはいけない……

近付けば羨ましくなる。

其れはそっくり怒りへと注がれるだろう。

とても理不尽な怒りに。

だが、理不尽とは何であろうか。

此の身の境遇こそ理不尽と言えるのではないか。

そうだ、不公平である。

押し流される感情に追い付こうと、足が静かに村へと向かう。

次第に早まる己の鼓動が五月蠅くて堪らない。

此の憤りの片付け方も分からない。

自分が何の為に明りを目指しているのかも、得体の知れない憤懣が阻み、理解の暇を与えない。

何が何だか分からない。

ただただ頭が熱くなる。

憤然とした鼻息が漏れる。

眉間に皺が寄り、眉尻が吊り上がる。

目玉は充血し、さながら鬼の形相である。

きっと私は強奪を働くのだろう。

もしかしたら、相手の命さえ取り上げるかもしれない。

そんな思いが浮かんだが、最早歩みを止める程の戒めにはならなかった。

今の私は善悪というものが分からないのだ。

次の瞬間、私は手近な一軒へと暴れ込んでいた。

だが、悪心に対して天はとても冷ややかだった。

勢いに任せて飛び込んで来た私を迎えたのは、一人の浪人風の男である。

僅かな驚きを見せたものの、其処はやはり幾らかの心得が有るのだろう。

即座に身を立て直すと私を躲し、擦り抜け様に男の手刀が痛みを持参して私を見舞う。

危うく昏倒は免れたものの、昇り詰めていた血汁が一気に冷めて行くのを感じて、私の身体の支配者が恐怖という名に変容する。

そもそも骨と皮だけの様な此の身体で、よくも相手の命を奪うなどと考えられたものだ。

震え出す両足を叱り付け、倒けつ転びつ外へと逃れる私を、男の冷静な視線が追い掛ける。

やはり近付いてはいけなかった……

足で走ったのか、腕で這いずり回ったのか、或いは転がり続けたのかさえ分からないまま、気付けば私は小さな鳥居の前に立っていた。

雑草の繁茂した中に埋もれる様にして佇む其れは、例え屋間であっても注意して見なければ見落とす程の、荒れ果てた小さな叢祠である。

私は鳥居と同じ様に自らを茂みの中へ隠し、少しずつ自分の状態を確認した。

荒くなった呼吸が肩を激しく上下させ、彼方此方から伝わる細かな痛みが、身体の其処彼処で傷の存在を訴える。

男は追って来るのだろうか。

結局の所、私は男に対して何の危害も加えていない。

其れ所か返り討ちに遭い、命の危機を味わったのは私の方ではないか。

あの男には、これ以上私を追い詰める理由が無い筈だ。

大丈夫。男はもう追って来ないだろう。

私がそう考えて安堵の息を吐き出そうとした時、視界の端に松明の炎が見えた。

呼気の外出を引き止め、注意深く松明の動きを窺うと、其れは先刻の男である事が分かった。

何という事だろう。男は私を追って来たのだ。

私は身を隠している草むらに頼り無さを感じ、叢祠の格子を開いて中へと逃げ込んだ。

中は意外にも整然としていた。

外の荒れ放題が嘘の様に綺麗な配置が取られ、まるで突き崩す隙が無い。

いや、単純に物が殆ど置かれていないから、整っている様に見えるのかもしれない。

草に紛れていた時よりも空間がひらけた所為か、私は却って落ち着かなくなった。

しかし既に後の祭りである。

今更外へ戻ろうにも、男の翳した松明はもう目の前まで迫って来ているのだ。

私は出来るだけ暗がりへ潜もうと、叢祠の一番奥へと移動した。

.....と、何かが肘に触れる。

思わず漏れそうになる声を掌で塞ぎ、私は恐る恐る其の正体を確認する。

其処には小さな箱が祀られていた。

御神体と言うには粗末な扱いであるが、内部の状態から考えれば、此の箱を祀った叢祠である事は間違いないだろう。

私は何やら此の箱から目が離せなくなり、躊躇いつつも手に取ってしまった。

興味の源泉を見出す事も出来ぬまま、私は其の蓋を開く。

其れは桐の箱に入っていた。

そう.....

確かに、其れは入っている。

伝え聞いた通り、其れは長さ一尺にも満たない。

水気は一切無く、乾燥して干涸らびた様に見える其れは非常に脆そうである。

箱の中に綿などは無く、少し揺すれば砕けてしまいそうな印象を受けた。

しかし触れてみると、見た目に反して弾力が有り、思いの外しっとりとしていた。

兎に角其れは桐の箱を寝床として、此の叢祠の奥に潜んでいたのである。

人の手に似ているが、飽くまで似ているだけである。

茶色に変色した其の腕は、即身成仏した坊主からもぎ取ったかの様な出で立ちであるが、明らかに人の其れとは質を隔てている。

指の本数が奇怪しいのだ。

此の手の持ち主には、生まれながらに指が一本足りていないらしい。

朽ちていく過程で崩れ落ちた様な痕跡も無いのだから、やはり元々が四本指なのだろう。

指の股には薄い皮膜が残り、水掻きの存在を主張している。

見る限り、嫌でも頭に皿を乗せた化生者を思い描いてしまう。

不可思議を前にして思い描いた姿が河童とは……

自らの稚拙な想像力に小さな笑い声を上げた時、私は途端に自らが追われている立場である事を思い出した。

しかし其れは既に遅く、折しも叢祠の前を通り過ぎようとしていた松明が、私に気付いて立ち止まる。

格子戸が静かに開くと、松明の炎に照らされた男の顔がゆっくりと叢祠の中を見回した。

不審な腕を握り締めたまま、私はかたかたと震えた。

恐ろしさから目を逸らしたい筈なのに、男の姿から目が離せなくなる。

私を捜す男の視線が其れに重なる。

冷たい目だ。

私は死を覚悟した。

覚悟はしたが、同時に助かりたいとも思った。

目の前の男が、此の瞬間に命の終わりを迎えば良いとさえ願った。

そうすれば私は助かる。

そうすれば私は生きていられる。

近付く男の姿を直視出来なくなった私は、強く両目を閉ざした。

ところが……

何時まで待っても此の命に終わりが訪れない。

幸いではあるのだが、どうにも不審である。

私が恐る恐る目を開くと、男はどうした事か、沫を吹いて仰向けに転がっている。

更に近付いて覗き込んでみると、男は白目を剥いて息絶えていた。

事態を理解出来ぬまま呆然とへたり込む私の手の中で、件の腕が小刻みに震えている。

私の震えが伝わったのではない。

手、其れ自体が震えているのだ。

私はとても気味が悪くなった。

衝動に任せて打ち捨てようとする自身の手を呼び止めたのは、不思議と不思議を結び付ける何かに気が付いた、私の小さな理性であった。

老人の昔話には、此の腕に纏わる不思議が語られていたのではなかったか。

此の腕が其れであるのなら、私は大きな好機を得た事になる。

端から信じてなどいなかった年寄りの話しが、眼前の浪人の姿に困って真実味を帯びてくる。

後は確証が得られれば良いのだ。

私は思案した結果、もう動く事の無い浪人の身体を、此の場から消し去れと念じてみる事にした。

いきなり大きな変革を望んでは、どの様な皺寄せが有るか分からない。

しかし既に人一人を殺めてしまっているのだから、其の骸を消し去る事くらい、塵芥を片付けるのと何ら変りは無いだろうと思った。

私は息を深く吸い込むと、今度は静かに、はっきりと願いを口にした。

腕が不気味に震える。

不規則な振動は其れを握り締める私へと伝播し、得体の知れぬ不安が胸中深くに押し寄せる。

訳も分からず涙が零れ、小さな嗚咽が其れに連なる。

自ら実行した事ではあるが、やはり不穏な気配に畏れを抱く事は否めない。

人外の力には、此の身を萎縮させる何かが潜んでいるのだろう。

そうして怯え戦っている内に、小さな腕の震えが止まる。

我に返った私が叢祠の中を検めると、浪人の骸は確かに姿を消していた。

まさに今まで転がっていた床板に、僅かな温もりと噴き溢した泡沫の痕跡だけを残し、其の骸は忽然と掻き消えてしまったのだ。

そして、其れ程の神通力に対して私が差し出した物と言え、矮小な恐怖心だけである。

事態を一つ一つ整理する為、思考を追い掛ける私の両目が動きを失くす。

一方で、固まってしまった鼻から上を嘲る様に、口端がゆるゆると綻んでいく。

奇怪な腕を握り締め、奇妙な叢祠の其の中で、奇態な笑みを浮かべる私は、既に人ではなくなっていたのかもしれない。

あれから何れ程の時を経たのだろうか。

私は腕に願いを託し、人を羨む身分から羨まれる立場へと変容を遂げていた。

最初の頃は、口にしてみたかった食べ物や着てみたかった着物など、小さな望みを満たして喜んでいたので。

しかし其れ等は、次々に新たな不満を生み落としては私に願えと囁いた。

抗い方を忘れた私は、欲望に任せて欲し続ける。

小刻みに震える腕への恐怖も感じない。襲い掛かる不安にもすっかり慣れてしまった。

誰かを羨み、同じ物を欲し続けた私は、次第に私以外の繁栄自体を妬ましく感じるようになる。

金銀財貨。酒池肉林。されとて私は満たされぬ。

私より優れた暮らしをする者がいる。

私の暮らしに並ぼうとする者がいる。

其れ等全てが疎ましい。

私にそんな感情を抱かせる者達は、即ち悪である。

私は何時しか、台頭する者達の消滅を腕に願う様になった。

あの者は病に倒れろ。

彼奴は辻斬りに遇え。

あの家は燃えてしまおうが良い。

去ね、死ね、消えろ……

奇怪で小さなあの腕は、ただただ震えを繰り返す。

私の気に入らない者を次々と片付ける、何と便利な腕だろう。

今の私は絶対的存在である。

神や仏と居並ぶ程に、私の傲慢は大きく育っている。

しかし此の神は、蟻の一噛みさえ許しはしない。

鰐鮫を欺いた兎には、八十神と同じ言葉を吐くだろう。

兎が大国主こそ八上比売を得ると言うなら、兎も大国主も、或いは八上比売さえ殺してしまえと願うだろう。

私を不快にさせる物事など、此の世に有ってはならないのだ。

そうして私の身代は膨れ上がり、巨大や巨万と称されるに相応しくなった頃の事。

早暁に不穏な喧噪を拾い、私は寢床から這い出した。

件の腕を引き寄せ内廊下に面した障子を開けると、何やら香ばしい匂いがする。

探る様に鼻を鳴らして進む内、行く手から強い熱気が感じられる。

其れは炎の運びし土産物。

上質の木材や紙が燃える甘い香りと裏腹に、火勢はいよいよ大きくなる。

呆然とする私の耳に、今度は荒々しい怒号が投げ込まれる。

振り向くと、長い廊下の向う側で奉公人が斬り倒されているのが見えた。

粗末でぼろぼろの着物の上に、恐らく戦場の死体から剥いだのであろう鎧を身に付けた男が、倒れる奉公人に止めを刺す。

野太刀の様な大振りの得物は刃毀れが酷く、此も何処からか剥ぎ取って来たのであろう。

野盗である。

男の目がざらりと私を睨め付けた。

後退る私の視界で、男が奉公人から刀を抜いた。

切っ先を引き摺る様にして近付いて来る男の後ろから、同じ目をした男達が何人も現れる。

私は背中を伝う汗に冷たい物を感じ、飲み込む事を忘れていた固唾を一気に喉の奥へと押し込めた。

ごくり……

其れは驚く程大きな音を立てた。

私は其の音に弾かれた様に踵を返すと、一目散に逃げ出した。

舞い上がる火の粉、視界に広がる煙、焼き討ちに会い倒壊する屋敷の全ての動きがゆっくりと感じられる。

私は私以外には目もくれず、ただひたすらに走り続けた。

足で走ったのか、腕で這いずり回ったのか、或いは転がり続けたのかさえ分からないまま、気付けば私は何時かの鳥居の前に立っていた。

相も変わらず雑草の中に埋もれた其れは、宵闇にあって見分ける事が出来無い程に、朽ち果てた小さな叢祠である。

私は何時かの様に茂みの中に隠れ、少しずつ自分の状態を確認した。

荒くなった呼吸が肩を激しく上下させ、彼方此方から伝わる細かな痛みが、身体の其処彼処で火傷の存在を訴える。

遠くの空が赤いのは、私の屋敷が上げた断末魔の叫びの形に相違無い。

少しずつ働き始めた頭が、私に今の状況を説き始める。

そして理解を深める程に、其れは怒りへと姿を変えていく。

私の屋敷である。

私の財貨である。

私の着物、私の食べ物、私の酒に私の女。

全て私の物である。

奴等は其れを暴力で奪い、焼き払ったのだ。
許し難い。
許し難い悪である。
そう、悪は滅ぼさなければならない。
私は神にも等しいのだから、此を遂行する責務が有る。

腕よ、悪を許すな。
今こそ大悪を裁け。
深き水底へと攫い、二度と此の世に生み出すな。

私の手の中で、奇怪な腕が大きく揺れ動いた……

緑色の風景が緩やかに身体を取り囲む。
隙間無く身体に張り付く緑色には、時々細かな黒色や茶色が浮遊している。
腕を振ろうと、足で蹴ろうと抵抗一つも無いのだが、決して私の身体から離れて行こうとはしない。
大きく暴れるだけ呼吸が荒くなる。
呼吸が荒くなれば吐き出す息も大きくなる。
私は鼓動の招きに呼ばれ、肺腑の奥から気体の塊を解き放った。
其れは大きな球体となり、見る間に天上高くへ舞い上がって行く。
無色透明な丸い息を眺め、私は自分の状況を概ね理解した。

此の身が運ばれて行く先は、まだまだずっと遠いだらう。
阿鼻獄へと落ちる程に、長い年月を沈み続けるのかもしれない。
何せ、二度と此の世に生み出されないのだ。

私の願いに、腕は何時でも誠実である。

凡そ二十間。

目測の誠直を信ずるならば、歩廊の長さは其の程度であろう。

板張りは既に黒色に近く、悠久の沈黙を以て齡を語る。

静やかさを近侍と添わせる様は神聖を感じさせるも、同時に重苦しさを表裏の理として呼び寄せ、長廊を歩む者から言葉を奪う。

無言の姿を厳かと言い換えれば聞こえも良いが、私の其れが気後れである事は明瞭である。

押し潰されそうな程に濃密な静寂は、一言をも認めぬ意志として甚だ雄弁であった。

私は黙々と此の長い廊下を歩いている。

一人ではない。

数歩先を先導する様に歩くのは、まだ帯解きも迎えぬ幼い女兒である。

私が一足踏み出す間に三步程を費やし、絶妙に一定の距離を保ちながら歩を進めているのだが、其の様は最早小走りに近い。

私は何だか可哀想に思い、歩調を少し緩めてみた。

果たして幼女の歩みも緩む。

気忙しく働いていた両足が落ち着き、変容した歩調に合せる様に呼吸を整える気配が伝わってきた。

私は微笑ましさを覚え、重々しい閑寂が僅かに軽く成った様な感覚を味わいつつ、再び廊下の先へと意識を向ける。

(はて.....)

凡そ二十間。

目測の誠直を信ずるならば、歩廊の長さは其の程度であろう。

そして今以て尚、其れは二十間である。

大雑把な見方で読み取った以上、無論幾何かの誤差が生じて然る可きではある。

とは言え、一間は疎か一尺さえも進んだ気配がないのは、一体どうした事であろうか。

私は小さく身震いがした。

兎にも角にも進まねばならぬ。

私は気を取り直し、改めて足を踏み出した。

当然ながら幼子も歩き出すので、私はまた歩みの早さを加減しなくてはならない。

居た堪れない不安に走り出したくも、一方で小さな其の足取りに気を配る。

胸中を針で突かれる様な思いが生じ、私は静かだった周囲が騒々とさざめき立つのを感じた。

そうして歩く内、四半刻は経ったかと思われる。

然るに凡そ二十間。

我が身の今は疲労と焦燥を積み重ねたに過ぎず、其の鬱積はやがて瞋恚を以て総身を蹂躪し始めた。

何故だ。

何故進めぬ。

腹が立つ。

私は到頭駆け出した。

無論、幼女も走り出すが、私は今度は気にしなかった。

寧ろ追い抜き、且つ置いて行こうとさえ思った。

何の確証も無かったが、先へ行けぬのは全て此の幼い娘の所為ではなかろうかと、そう疑ったからである。

歩調を合わせたが故に私の行程は遅滞しているのだ。

高が二十間が斯様に遠い筈がない。

何を遠慮していたのだろうか。

幼子など気に掛けず、一人早々と先を急げば良かったのだ。

私は韋駄天宜しく、猛然と走り続けた。

然るに凡そ二十間。

長廊の終わりは未だ少しも近付かぬ。

息が荒くなる。

胸が苦しくなる。

体が重くなる。

私は一旦立ち止まると、廊下の終わりを憎々しげに睨んだ。

胸の拍動が静けさを打ち消し、誘われる様に汗が吹き出す。

双眸に染み込もうとする汗を拭い、再び目を開けた私は瞬間にして凍り付いた。

眼前には相変わらず娘が立っていたのである。

年の頃なら十五、六か。

嫺やかさよりも、まだ邪気なさの方が幾分勝る様に見える。

注意深く辺りを窺うが、先刻までの幼子の姿は見当たらない。

(面妖な.....)

そう思いつつも、件の幼女が育ったのだと思う事に私は何の不思議も感じなかった。

其れよりも、あれ程必死で走ったにも拘わらず、此の娘が依然として目の前に立っている事が、私に新たな不安を抱かせた。

一度遠離れた拍動の音が、私の中に甦る。

だが、此は走った故の其れではない。

緊張が細糸を繕る。

疑念は正体を見定める事で容易に氷解するものであるから、私は娘の面を検めようと思いついた。

躡る様に右足を出すと、果たして娘も一足を出す。

縮まぬ距離に手を伸ばしてみるが、限り限りの所で届かない。

止む無く左を出せばまた進む。

何故だ。

何故届かぬ。

腹が立つ。

私は今度も駆け出した。

成長した娘も、実に軽妙な走りを見せる。

私は一向に娘に追い付けず、かと言って遠く引き離されるでもないまま、どれ程を走らされたの

だろうか。

心持ちとしては一刻程も走ったか。

己の何処に其れ程の身力があつたのだらうと、私は奇妙な感心を覚えた。

更に半刻、娘の襟首を見続ける様にして走る内に、私は何やら違和感を覚えて立ち止まった。

当然、娘も合せて止まる。

(はて……)

年の頃なら七十辺り。

娘のうなじは、既に老齡の其れである。

肩を大きく上下に動かし、呼吸を収めるどころか呑み込まれてさえいる様だ。

大層身勝手な様ではあるが、私は何だか可哀想に思い、其の背を擦ってやろうと近付いた。

しかし老人は同じだけ遠離り、私は此処でも追いつけない。

致し方ないので、老人が休まるまで私は前進を諦めた。

やがて老人の息遣いが落ち着くと、途端にまた重苦しくも清浄な静けさが辺りを包み始める。

やおら視線を先へと向けて、私は再び歩き出す。

老婆も再び歩き出す。

然るに凡そ二十間。

私の歩みは此からである。

筋斗

荒涼とした風景というのは、其の荒れ果てた心寂しさに趣を持つ物である。

趣を得れば情動が発芽する。

譬え開闢より不変の景色であろうとも情動が儂さを焚き付け、正史にも野史にも残らぬ盛衰が立ち上る。

美意識を遠きに馳せ、虚と実の隙穴を埋める自らにさえ感嘆する。

故に荒涼とは人為的であり、眼前に広がる此の景色を荒涼と表すには至らないと言える。

殺風景。

強いて言葉を持ち出すならば、其れが適切な様に思える。

起伏に乏しい平坦な野である。

荒れているという表情さえ持たないのだから、荒野と呼ぶ事も憚られる。

ただただ平たく、草木の類も見当たらない。

遮る物も無い其の地の上で、私は静かに立って居る。

一人ではない。

右手に五人。

左手に三人。

私を合わせて九人である。

前方には別の九人が横並びに立ち、其の九人と九人の間にもう二人。

何れも男である。

都合二十人の男が同じ方向を向き、惘惘として立ち尽くして居る。

否、惘惘と言うからには抜け落ちた感情の残り香が有っても良い筈だ。

其れすら感じられぬのだから、矢張り彼等も殺風景と表現する可きなのだろうか。

私は心細くなり、少しでも景色に変化を求めようと考えた。

だが、見回した所で地平以外には何とて見えぬ。

思案の末に、私は居並ぶ男達の服装を観察し始めた。

せめて何かしらの色彩を感じたかったのだ。

手始めに左の男を見た。

鈍色の鎖を細かく編み込んだ帷子の上に、白銀に輝く甲冑を纏って居る。

丁寧に磨かれた古めかしい大刀を佩き、弓手に携えた大陸風の大きな楯が印象的である。

何れ戦装束には違いない。

白銀の煌めきは美しいのだが、光彩は光であって色彩と呼ぶには乏しく思われる。

私は次の男に期待した。

覗き込むと暗褐色の何かが見えた。

色と言えは色なのだが、私はもう少し華やかな色が欲しかったから、此は聊か不満である。

凝らして見ると細かな毛が生えている様である。

凡そ人間の身体として連想出来る部位が浮かばない。

仕方が無いので全体像を見ようと、私は少し身を引いた。

鎧が見えた。鞍が見えた。そして男が乗って居る。

白銀の男の次に居たのは騎馬であった。

騎乗の男も白銀の男と同様に、矢張り戦装束である。

私は気が重くなった。

其の隣も然り。

案の定、其処には槍を抱えた男が立って居た。

私は自分の思考が殺風景な物に成って行くのを感じた。

どうやら此は戦である。

気が付いて、私は自らの出で立ちを確認する。

白銀の男とは対照的に、私は黄金の甲冑に身を包んで居る。

腰間の得物も金色を基調とした拵えである。

此処に至って派手な色彩を得られた訳だが、私は最早何も感じはしなかった。

前方の九人の男達は、どうやら歩卒であるようだ。

ぐるりと視線を廻らせて、私は自分の右隣の男を見た。

馬鞭を持っては居るが騎乗しては居ない。

鎧も甲も身に着けず、明らかに軽装である。

戦場に在って不自然ではないか。

私は少々首を傾けた。

斜めに成る視界に合わせ、傾けた分だけ男の向う側の世界が顔を出す。

すると、其処に私が見えた。

反射的に顔を起こし、私の姿を視界から外す。

私が二人居る。

私は不安になる。

私が二人居る。

私は恐ろしくなる。

私が二人居る。

然し、何うしても今一度確認せずには居られない。

恐る恐る覗き込むと、果たして私が其処に居る。

金色の身支度の私は、御多分に洩れず惘惘と……否、殺風景に控えて居る。

背中が薄ら寒くなる。

怖さと同時に嫌な気持ちが湧いて来る。

私が彼の様に殺風景な……

殺風景な……

そうか。

こうして思考を巡らせている私が殺風景な筈は無いから、其れは単に同じ身支度の男なのだろう

。

見れば其の向うには白銀の男が続き、騎馬、槍と鏡合わせの様に此方側と同じ姿が立ち並ぶ。

要するに、此は然うした陣立てなのだ。

と言う事は……

中心は此の男。

私は此の右隣の男が将帥であると理解した。

どうやら此は戦である。

気が付いて、私は前方遙かを確認する。

自軍の布陣と同様に、殺風景な一団が佇んで居る。

数も配置も同じなら、装備もほぼほぼ同じに見える。

乱戦時には区別も付くまい。

どうやら此は戦である。

気が付いて、私は恐怖と狂気に身構える。

どうやら此は戦である。

気が付いて、私は周囲の動きに気を配る。

どうやら此は戦である。

気が付いて、私は……

戦況は一進一退である。

自軍が押せば敵軍は引く。

乗じて追えば誘い込まれる。

遁走すれば追い討たれ、其れを誘って又囲む。

捕らえた敵兵を懐柔すれば、捕らえられた味方が同じ理屈で立ち塞がる。

殺風景な兵達は、敵と味方を殺風景に行き来する。

然うした事を繰り返す内、我々は漸く敵陣の一角を切り崩した。

先行して歩卒が突入する。

其の時である。

敵陣へ到達した歩卒が私に成った。

否、私は此処に居る。

だから彼は私ではないのだ。

戦の緊張が、私に有らぬ幻を見せて居る。

私は軽く頭を振る。

改めて敵陣に目を遣ると、二人目の歩卒が突入する所である。

勝ち戦の流れである。

此の勢いは維持したい。

私も遅れぬ様に走り出す。

と、歩卒が私に成る。

そんな馬鹿な事が有る物か。

瞬間、足取りが鈍く成った私を追い越して騎馬が突入する。

騎馬が私に成る。

何だ……

槍兵が私に成る。

何なのだ……

白銀が私に成る。

何だと言うのだ。

私は半ば自棄となり、敵陣へ向けて駆け出した。

気味が悪い。

気分が悪い。

気持ちが悪い。

腥い。

だから手早く終わらせよう。

敵の将帥を討てば良い。

戦が終われば幻も見まい。

早く、早く終わらせよう。

私も早く敵陣へ乗り込むのだ。

敵陣へ。敵陣へ。敵陣へ。

敵陣へ踏み込むと、敵将が大勢の私に取り囲まれて居た。

其の異様を前に私は怯む。

大勢の私が、一斉に私を振り返る。

殺風景な私が私を覗く。

違う、私は殺風景ではない。

だから彼等は私じゃない。

私じゃない私が私を覗く。

私は私に成らないのかと、私が私の瞳を覗く。

見るな。

私は常から私である。

だから私は.....

私は.....

わたし.....は.....

私はくるりと引っ繰り返る。

そして私は真っ白に成った。

高く幽かな音が響いて居る。

身動く際の衣擦れに掻き消える程細く、呼気を漏らせば其れだけで見失う程に小さい。

透き通る様な高音は、事実限りなく透明に近いのだ。

耳を凝らさなければ、決して捉える事は出来無い。

私は瞼を半眼に開き、薄ぼんやりとした視界の中に音の足跡を探した。

都を離れて何れ程か……

何処とも知れぬ山中を、私は供も連れずに踏み進む。

濫立する木々が人跡未踏を主張し、騒騒と不安を煽る様に揺れ動く。

霊陽は既に午の刻限に添い立つ物の、巡る枝枝に遮られ然したる恩恵も施せないから、周囲は何とも鬱鬱として薄暗い。

木の根は念仏が聞こえて来そうな程に苔生して居るのに、其処を歩めど何の功德も得られぬ事は明白である。

其の上、葉を茂らす無言の集団は汁気の多い息を撒き散らす物だから、じめじめとして不愉快だ。

私はじっとりと張り付く衣に苛立ちを覚え、胸元の合わせを大きく開くと、ばたばたと揺すって懐へ風を送り込んだ。

手拭いを出して額を拭うと、幾らかさっぱりとした心持ちに成る。

だが同時に、今まで感じて居た粘り気の有る不快感が、周囲から付着したばかりではなく、私自身の身体からも染み出して居たのではないかという疑心が芽生えた。

途端に厭な気持ちに成り、私は今一度ばたばたと衣を鳴らして清涼を求めた。

似た様な木立、似た様な苔、似た様な暗さ、似た様な不快感が延延と続く。

其れで居て、其れ等は一つとして同じ物ではないのだから、全く以て気が遠く成る。

移り行く同じ風景と自らの足音、そして耳朶を擽る湿った気配。

樹海は巧みに寄せては返し、私を波間に弄ぶ。

枝葉の囁きは潮騒に変わり、耳元に取り付く癖に忍び笑いで当て擦る。

不快は苛立ちに、苛立ちに怒りに、怒りは後悔に、後悔は疲弊に路を繋げ、竟に私は立ち止まる。

然し止まってみると、存外周りが気に成らなくなった。

居並ぶ木木よりも私の呼吸の方が荒い。

苔衣の念仏よりも私の鼓動の方が大きい。

陰鬱な薄暗さは血の巡りの良く成った私の肌には打ち勝てず、纏わり付いた不快感も、開いた毛穴から噴き出した汗が攫って行く。

私は再び手拭いで汗を拭う。

今度は本当にさっぱりとした。

不安を募らせた大いなる樹海も、己を鎮めてみれば清廉で麗らかな森である。

何と矮小な事か。

私を宇内に描くなら、私は孤独を夢想する。

私に宇内を描くなら、私は安堵で満たされる。

何れ此の世とは、私の事に相違無い。

私が動けば此の世も動き、私が止まれば此の世も止まる。

然し私の此の世を誰かに見せても、其れは誰かの彼の世でしかないのだろう。

ならば此の世は彼の世と同義である。

此の森も、私が森と思えばこそ私の此の世に在り、同時に彼の世と思うから恐れもしたのだ。

実に馬鹿馬鹿しい。

自嘲を見せ付ける供も居ないから、私は木木に木霊を誘う様に、殊更大きく溜息を吐いた。

と、返って来たのは水の流れる音だった。

近くに川が在るのだろうか。

そう言えば、何だか喉が渴いた様な気がする。

気がしだしたなら仕方が無い。

私の此の世は、渴きを満たせと歌い出す。

潤いを求める様な喉なのだから、少しは静かにして居れば良い物を、水を寄越せと囁しい。

何と我が世の矮小な事か。

私は耳を敬てて、水流の私語を追い始めた。

最初はちょろちょろと流れる様な音だと思った。

決して強い音ではないのだから、其れが聞こえる位の所に在るだろうと高を括った。

水音の聞こえて来た方へ歩き出すと、足音が直ぐに其の音を掻き消した。

然し方向は間違っていない筈だと思い、暫く其の儘歩き進む。

所が何時迄も川は見えて来ない。

不審に思って立ち止まり、今一度川の音を探してみると、矢張り進んで行く先の方から聞こえて来る。

安堵の息を吐き出すと、其の吐息に吞まれる様に水音は消えてしまう。

私はもう一度確かめる様に耳を澄ましてみる。

はて.....

最初はちろちろと流れる様な音だと思った。

其れが今は、潭潭とした水の気配が辛うじて風に揺れる程度の静かな音である。

川と思って歩き出しているからこそ、其れでも未だ水の気配と信じられる物の、端から此の程度の感覚であれば見逃していたであろう。

尤も、然うであれば喉の渴きが騒ぎ出す事も無かったやも知れぬ。

私は改めて、我が世の狭さを実感した。

とまれ知ってしまえば欲しく成る。

喉の渴きは一向鎮まる気配もないのだ。

私は再び歩き出した。

最初はちろちろと流れる様な音だと思った。

次には風に揺れる潭潭とした気配に近い、静かな音だと思った。

そして今、高く幽かな音が響いて居る。

身動く際の衣擦れに掻き消える程細く、呼気を漏らせば其れだけで見失う程に小さい。

透き通る様な高音は、事実限りなく透明に近いのだ。

耳を凝らさなければ、決して捉える事は出来無い。

私は瞼を半眼に開き、薄ぼんやりとした視界の中に音の足跡を探した。

濃厚な静寂と澄み切った緊張が紡ぐ、何処か金属的でもある静謐な反響。

聞こえるという事が静寂を裏付け、静寂である事が大気に震えを生み出している。

静けさと騒がしさは、此の世と彼の世の其れと同じなのだろう。

水場は未だ現れない。

私は耳を澄ます。
自分の足音がする。
音が聞こえなく成るから歩みを止める。
私は何時しか渴きを忘れ、此の清澄な音の姿を捉えたく成っていた。

私は耳を澄ます。
自分の呼吸の音がする。
邪魔である。
私は息を止める。
急激に水音が近付く。
高く幽かな音は、僅かな内に濁流の様な荒々しい音へと変容して、私の此の世に押し寄せる。
否、違う。
高く幽かな彼の音は、迫り来る轟音の中に在っても同じ儘である。
私には今、荒ぶる水流の怒号と一緒に彼の透き通った高音が聞こえているのだ。
高い音が私を呼ぶ。
濁流が私を呑み込もうとする。
苦しい。苦しい。
何だか頭が痛く成る。
苦しい。苦しい。
私は水を求めていたのではなかったか。
其れなら吞まれてしまえば良いではないか。
然う思う私を引き止める様に、件の高音が大きく成る。
未練が生まれる。
耳を澄ます。
頭の芯の方がきりきりと痛い。
苦しい。苦しい。
半眼にしていた両目を大きく開く。
視界が紅い。此の世が紅い。彼の世が紅い。

あれは……

あれは……
そう、川である。
轟轟と音を立て、真っ赤な大河が流れ行く。
流れの中には岩が立ち、飛沫が爆ぜてはきらきらと陽光を照り返す。

私は耳を澄ます。
高音はもう聞こえない。
頭痛も引いた。
すると渴きが甦る。
然し、此の真っ赤な水を飲むのは何だか憚られる。

もう少しなら我慢も出来よう。

私は別の水音を求め、改めて耳を澄ましてみる。
聞こえない音を探して、私の此の世は広く成る。

蠭螂闇

蠭螂闇

かさり……

空気が揺れた……気がする。

かさり……

かさり……

気がするだけだから、音を感じた訳ではない。

自らの呼吸を間引いて、外耳道に侵入する透明な気配に集中するが、気配は虚ろな程に無音である。

かさり……

其れでも矢張り、空気が揺れて居る……気がする。

月影清かな夜を楽しんだのは、四半刻程前迄の事。

今や天の鏡は黒雲の中にある。

否、恐らく雲は白色なのであろう。

只余りに分厚く、夜空に君臨する金色の輝きさえ遮るに至り、己の身をも黒色に染めてしまっているだけなのだ。

御蔭で地上は闇色に飲まれ、一寸先さえ見通せぬ。

私は右手の指を丁寧に伸ばし、日頃の感覚を思い出しつつ、自らの右頬に触れてみた。

生え掛けの髭のちくちくとした主張を受けて、此の身が未だ、闇に溶け出さずに存在して居る事を知る。

僅かに安堵した。

だが同時に、不安であったのだと言う事実をも拾い上げてしまう。

開いて居るのか閉じて居るのかさえ判然としない瞼の暗闇に、私はそわそわし始めて居るのだ。

落ち着かねばならぬ。

共連れも居らぬ闇夜の中では、頼る者として己一人。

此の足先を危胎へ運ぶか否かも、私自身の裁量なのだ。

私は右手を頬に残した儘、出来るだけゆっくり呼吸をした。

吸い込む傍から身の内が闇色に浸食されて行く様な錯覚を覚えつつ、頬と右手が分かち合う感触を抛り所として、出来るだけ深く吸い込み、長く吐き出す。

頭に移った鼓動が、静々と在るべき胸へと帰って行く。

其の調子だ。

私は自分自身を後押しした。

かさり……

空気が揺れた……気がする。

鎮まり掛けた拍動が、再び暴徒と化す。

何だ、何が居る。

何かが居る。

此の闇の中に、何かが潜んで居る……気がする。

声は無い。

音もしない。

然し空気が……揺れて……居る……気がする。

其処に在るかも疑わしい鼻の先で、緊張が香ばしさを振り撒く。

きりきりと胃の腑が締め上げられて、頬の右手を腹へと移す。

在る。

確かに私の腹が在る。

盲いた夜への霧散を免れ、じくじくと泣き出しそうな私の身体が確かに其処に……在る気がする……

此れは、果たして、私の、身体なの、だろうか。

緊張して居るのは私だ。

然う思って居るのは私だ。

内腑の振れを感じて居るのも私なら、右手を使役して居るのも私だ。

然し、当たり前のように首から下が己の身体であったのは、未だ煌煌と月が照って居た頃の話しだろう。

暗がりを利用して、何者かが私の首から下を挿げ替えてしまっていて居たとしても、私が其れに気付く事が出来ただろうか。

私の意識を汲み取った不明の誰かが、触れて居ると言う感覚だけを、直接私の意識に返して来て居るのかも知れない。

かさり.....

かさり.....

御前は何者だ。

私の身体を奪ったのは御前なのか。

否、奪われたのは身体であると決め付けてはいけない。

意識が頭に宿るだなんて、其れは私の思い込みかも知れないではないか。

奪われたのは首から上で、私は残された身体の中で考えて居るのかもしれない。

否否、私は先刻右手で頬に触ったのだ。

頬は右手を、右手は頬を感じた筈だろう。

頬だけが在ったのではない。

右手だけが在ったのではない。

確かに在る。

在るのだ。

在るのだろうけれど、何うしても曖昧に感じてしまう。

頼り無さが拭えない。

焦燥が緊張と連れ立ち、胃の腑を更に締め付ける。

痛みに声が漏れる。

然し其の声さえ、何だか自分の物では無い様に思える。

嗚呼……胃が痛む……

私の呻き……の様な物に呼応したのか、胃の腑がぎりぎりとう鳴いた。

恐らく私の呻き……だったであろう小さな声よりも、はっきりした音で鳴いたのだ。

宛ら蟲の鳴くが如く、ぎりぎり、ぎちぎちと発して居る。

丈夫な顎を持った頭部から出した音だろうか。

若しかしたら鳴き声ではなく、何かしらの所作に準じた物音かも知れない。

かさり……

空気が揺れた……気がする。

そうか蟲よ、御前の動く気配だな。

私の首を、其の境を曖昧にしたのは、御前を出す物音……が在る様な其の気配なのだ。

瞬間、私は希薄に成った自らの首筋に、大きな鎌を宛がわれて居る様な寒寒しさを感じた。

かさり……

闇の中に蠶螂が居る……気がする。

此の闇の中に蠶螂が居る……気がする。

かさり……

かさり……

近い。

迎も近い。

息遣いが聞こえる……気がするだけだけれど、ぎちりぎちりと蠍が居る……気がする……気がする……気がする……

全身の毛穴が広がり、温もりを置き忘れた汗が滝の様に流れ出し……て居るに違いない。

私は海から上がったみたいにぐっしょりと濡れ濡つ身体を抱いて、がたがたと震えた……筈である。

彼の懐かしい月の光に助けを乞おうと、真っ暗な空を見上げ……たと思う。

其れは空だったろうか。

見上げたのだろうか。

見下ろしたのではないのか。

最早、己の身が何処に在るのかも臆気である。

私はすっかり、暗い夜の中に溶けてしまったのだ。

それなのに……

かさり……

意識よ、御前も早く溶けてしまえ。

かさり……

ぎちぎち.....

闇の中には蠃螂が居る.....気がする。

私は其処に.....

居る様な.....

気がする.....

臆話 おぼろばなし

<http://p.booklog.jp/book/34326>

著者：深沢幸弘

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yukiyukisan/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/34326>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/34326>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.